「文化の学としての出版・編集論構築のための基礎的研究(2)」

研究年度・期間：平成20年度

研究ディレクター：藪　亨（教養課程　教授）

共同研究者：山縣　熙（文芸学科　教授）　長谷川郁夫（文芸学科　教授）　田中　敏雄（教養課程　教授）　武谷なおみ（文芸学科　教授）　山田　兼士（文芸学科　教授）
豊原　正智（芸術計画学科　教授）　笹谷　純雄（文芸学科 准教授）　出口　逸平（文芸学科 准教授）

学外共同研究者：石塚　純一（札幌大学文化学部　教授）　川上　隆志（専修大学文学部　准教授）　瀧本　雅志（岡山県立大学デザイン学部 准教授）

研究補助者：福江　泰太（文芸学科 非常勤講師）

近年の傾向として、日本文学学科の文芸学化を反映してか、いくつもの大学に出版また編集に関する講座が設けられるようになったが、ジャーナリズム・情報学の一環、あるいは文学史・文化史講座の一部として扱われ、その問題の重要性にも拘わらず、現在のところ、各講師の経験、見聞、またその視野に捉えられた限りの問題を講ずるものにすぎないのが現状といえる。出版・編集は学問としては未開拓の領域に留まっている。編集・制作の技術をプラクティカルに教授することはそれなりに意義のあることと考えられるが、専門学校ではない大学という場においては、技術教育だけで十分とはいえない。それを支える理念構築（のための第一歩）へのアプローチが急がれる。

とはいえ、そこにはさまざまなテーマが茫漠と想起されるばかりである。そこで、まずは「書物は一個の芸術作品である。つまり、一個の物体にすぎないが、品性を具え、特殊な思想の刻印を打たれた物体、また意志的な見事な秩序を目指した高貴な意図の存在を暗示する一個の物体である」(「書物および稿本について」) というポール・ヴァレリーの言葉を手懸かりとして、理想の書物を実在化させる編集・出版という機能を、前年度の研究成果を踏まえてさらに追求した。

【A】本文（テクスト）について……編集

【B】本文の器としての書物について……出版

それぞれに対しての１）歴史的なアプローチ、２）文化面からのアプローチ、３）創造性の観点によるアプローチ、を複合的に試みた。

例として、

１）については、

- 古事記など口誦（声）から写本（文字）への移行過程に「編集」はどのように機能したかを考察した。
- グーテンベルクの聖書印刷を取り上げ、「思想の刻印」といったテキスト発生の初源的な

問題から【A】信頼すべきテキストの成立を目指すための「意志的な見事な秩序」としての、校正、校閲、索引の役割までを問うことを試みた。

2）については、グーテンベルク以降、複製技術による書物がどのように文化を先導したか、大量消費、マス・メディアの時代において本とは何か、を問うことを推進した。

ここでは時代を読む力とされる編集における「企画」の意味、そのあり方が対象とされた。

また、【B】の観点からは「高貴な意図」としてデザイン・装本の問題が浮かんでくる。ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動の仕事を21世紀の新たな観点から問うことを試みた。そしてその成果の一端を、〈ウィリアム・モリスと印刷芸術の再興；草創期の「ケルムスコット・プレス刊本」〉展（大阪芸術大学博物館、平成21年1月8日～27日）において報告した。

3）については、文芸作品成立に関わる編集のはたらきについて考察を深めた。

テーマは多岐に亘り、とりあえずは試み、問題提起のための研究ではあるが、文芸学科のみならず、他学科の関連講座担当者との連携、また学外研究員の協力を得て研究会を開催し、各自のテーマについて報告し論議した。

そして本年度の研究成果に関して、以下の個別研究テーマに基づいて、研究報告書を作成した。

1、山縣　　熙　•出版・編集の原理論について
2、長谷川郁夫　•出版・編集の研究・調査
3、藪　　亨　•ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスについて
4、田中　敏雄　•近世における画譜の出版・編集について
5、武谷なおみ　•出版・編集とイタリア文学の関係
6、山田　兼士　•出版・編集と現代詩の関係
7、豊原　正智　•出版・編集と映画の関係
8、笹谷　純雄　•出版・編集と美術書の関係
9、出口　逸平　•出版・編集と戯曲の関係
10、石塚　純一　•出版文化史に関する研究・調査
11、川上　隆志　•編集・日本文化史に関する研究・調査
12、福江　泰太　•編集者の視座からの書誌学研究の可能性について
13、瀧本　雅志　•表象文化に関する調査・研究